

part 3 オオハムとシロエリオオハムの識別

榎本秀和（鴻巣市）

◇はじめに

筆者はこれまで、支部報『しらこぼと』の155号（1997年3月号）および209号（2001年9月号）の2回にわたり、「オオハムとシロエリオオハムの識別」について文献から引用し紹介してきた。

識別のポイントをあらためて述べれば、すなわち次のとおりである。

①喉の線（chinstrap）の有無

シロエリオオハム（以下、シロエリと略記する）冬羽では、喉のところに黒褐色の線が出るがオオハムには出ない。

②脇腹後部の白斑の有無

この白斑が確認できれば、夏羽・冬羽を問わずオオハムと考えてよい。

③下尾筒基部の線（vent strap）の有無

シロエリには下尾筒基部に黒褐色の線があるが、オオハムにはない。このことに関しては、『Birder』1997年2月号掲載の「アビ類観察の楽しみ」（木村裕一氏）に詳しい。

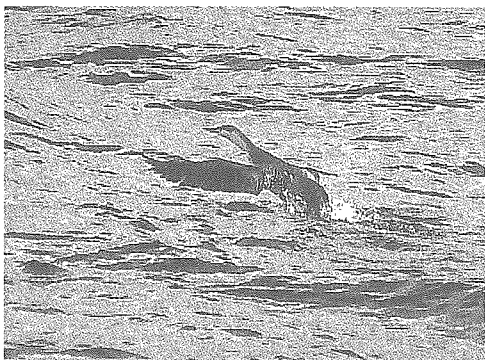
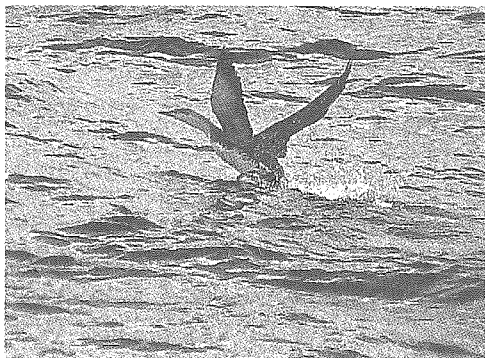
下尾筒となると通常は見えない部分であるが、腹面を見せて羽づくろいをしているときとか、頭上を低く飛んだときなどには見ることができるともかもしれない。

さて、3回目となる今回は、その後、新たに文献から得られた知見と、実際の観察体験とを照合しながら、アビ類全体を見渡してやることにする。

◇再び、ある日のこと

前回、筆者はアビ類の船上からの観察として、近くに船がさしかかっても飛び立って逃げるとは限らず、翼をばたつかせ、足で海面を蹴り、「泳いで逃げる」個体もあると述べた。

ところがである。ある日のこと、『Birder』2002年1月号の「シロエリオオハムの換羽～いちどに抜けて飛べなくなる～」



飛び立せずに海面を逃げるアビ

(平岡考氏)を読んで、「なるほど!」と気がついた。

平岡氏の論考によれば、オオハムとシロエリは春季に完全換羽し、初列風切羽もいちどにごっそり抜けて、一時的に飛べなくなる、というのだ。とすれば、船が近付いても飛び立つことなく、「足踏み式ボート」を漕ぐように海面上を逃げて行く様子についても合点が行く。

筆者が船上からアビ類を観察するのは、このところ1月が多いが、個体差があっても1月には換羽が進行している、ということだろう。

筆者は本年1月にも大洗-苫小牧航路を往復して、アビ・オオハム・ハシジロアビを観察したが、飛び立って逃げる個体と、そうでない個体とが確かにいる。換羽の進行の個体差がどの程度のものかわからないが、ひとつ疑問が解けたような気がしている。

◇アビ類の識別

アビ目アビ科に属する野鳥は5種類ある。

アビ・オオハム・シロエリオオハム・ハシグロアビ・ハシジロアビであるが、ハシグロアビの未公認(?)記録を含め、全種類が日本近海で観察されている。

オオハムとシロエリの識別については前述した。

アビは最も小さく、嘴がやや上に反っているように見える。冬羽では、*Gavia stellata* という学名のとおり、体の上面に小白斑が星のように散在する。

ハシジロアビは最も大きく、嘴は黄白色で太い。アビ類で嘴が白っぽいのは本種だけである。頭もごつい印象を受ける。

ハシグロアビは、筆者は海外でしか観察したことはないが、ハシジロアビの嘴を黒っぽくしたような感じの鳥であった。

アビ類が飛んでいる姿を識別するのは難しいが、飛行姿勢が似ている大型カイツブリ類

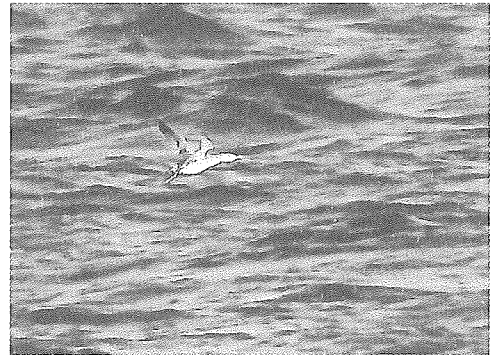
は翼上面の前縁が白いので、アビ類との識別は容易である。

◇おわりに

もう10数年も経つだろうか。岸边から海上へ降りて泳ぎ出す冬羽のアビ類を見たことがある。そのときはオオハムだと思ったのだが、後頭部に丸い白斑が二つ、水平に並んでいた。この後頭部の白斑がわからない。このことについて文献的な裏付けなり、観察記録などがあればご教示願いたい。

オオハムとシロエリの識別について、思いがけず3回にもわたって述べてきたが、相手は海上に点在する鳥たちである。いつどこへ行けば見られる、というものでもないので、限られたチャンスを生かして観察を積み重ねて行きたいと思う。

(写真:海老原美夫 2003年1月 三陸沖)



海面から飛び立つハシジロアビ